

海洋生物レッドリストの作成により明らかになった点について

魚類レッドリスト作成で明らかになった点

[1] 海産魚類の絶滅危惧種の総数は 16 種であった。その内訳は絶滅危惧 IA 類 (CR) 8 種、絶滅危惧 IB 類 (EN) 6 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 2 種であった。汽水・淡水魚類等を除いた日本産海産魚類の評価対象は約 3,900 種であり、絶滅危惧種の割合は 1% 未満と低かった。これは汽水・淡水魚類で示された 21% に比べると低い値であるが、海産魚類は汽水・淡水魚類に比べ評価対象が多いにもかかわらず情報が十分でないことによるところが大きい。

[2] 絶滅危惧 IA 類 (CR) 8 種については、南西諸島の限られた湾内にしか見つからない種 (ゼブラアナゴなど)、生息調査や釣獲記録、レジャーダイビングなどで観察機会が多いにも関わらず、近年成魚がほとんど見られなくなっている種 (タマカイなど) などが挙げられ、特に南方の種において絶滅の危険度が高いとされた種が多くなった。また、これらの種は沿岸性のものが多く、生息地は人為的攪乱が生じやすい地域であることも絶滅の危険度を高めた要因のひとつであると考えられた。

[3] 絶滅危惧 IB 類 (EN) には 6 種、絶滅危惧 II 類 (VU) には 2 種が挙げられ、CR と同様、南方の種が掲載される傾向にあった。シロワニは水族館等で飼育されることの多い種であるが、国内での生息は小笠原諸島に限定され、絶滅の危険度が高いとされた。カムリブダイはダイバーによく知られる種であるが、主要な生息地である沖縄、八重山の市場調査ではほとんど成熟魚が見られないことが指摘されている。また、コイチはかつての生息地で漁獲が減っており、カラスも国内における成熟個体数は少ないことが示唆されている。

[4] 準絶滅危惧 (NT) には 89 種が挙げられた。サンゴ礁を生活の場とし、生活史上もサンゴに強く依存するような魚類が多く掲載される傾向にあった。

[5] 情報不足 (DD) には 112 種が挙げられた。この中には最後に生息が確認されてから長い期間にわたり再確認されていないなど、極めて絶滅に近い状況である可能性のある種も含まれており、今後の精査が求められる。

[6] サメ類・エイ類については NT および DD に含まれる魚種が多いが、これらの魚種は一般的な魚類と比べ相対的に産卵・産仔数が少なく、捕獲圧などによる潜在的なリスクは高いと考えられる。

サンゴ類レッドリスト作成で明らかになった点

[1] 国内のサンゴ類の分類学的研究は遅れており、近縁種群内における分類の混乱や、多数の未記載種の存在が指摘されている。サンゴ類分科会として評価を始めるにあたり、まずは評価対象種となる分類群（イシサンゴ目、アオサンゴ、クダサンゴならびにアナサンゴモドキ類）を決定し、その目録を整理した。評価対象種として整理した種数は約 690 種であった。現段階で種としての分類が確定していないいくつかの種については、今回の評価を差し控えた。

[2] 絶滅危惧種は全部で 6 種であった。内訳としては、絶滅危惧 IA 類 (CR) 0 種、絶滅危惧 IB 類 (EN) は 1 種、絶滅危惧 II 類 (VU) は 5 種であった。また、準絶滅危惧 (NT) は 7 種、絶滅 (EX) が 1 種、情報不足 (DD) は 1 種であった。

[3] 本評価により、オガサワラサンゴを絶滅種 (EX) として評価した。本種は、父島二見港東岸の潮間帯にわずかに生息していたが、さまざまな研究者や環境省の調査等が行われているにも関わらず、小笠原諸島を含む日本全域からその後全く再発見されていないことから、飼育・栽培下を含め我が国では絶滅したと判断した。

[4] 絶滅危惧種 (IA 類、IB 類、II 類) 6 種のうち、3 種 (エダミドリイシ、オオナガレハナサンゴ、ハナサンゴモドキ) は種子島以北の比較的緯度の高い海域に分布する種であった。2 種 (オキナワハマサンゴ、ヒユサンゴ) は千葉県以南からサンゴ礁のある低緯度海域にかけて分布する広域分布種であり、残りの 1 種 (アミトリセンベイサンゴ) は奄美大島及び西表島海域のみに分布する種であった。これらの種は生息域が局所的である、あるいは極度に分断されるなどの特徴があり、きわめて稀にしか確認されず、さらに減少傾向があること等などから絶滅危惧と評価した。

甲殻類レッドリスト作成で明らかになった点

[1] 甲殻類では、絶滅または野生絶滅とされた種はなく、絶滅危惧種の総数は30種であった。その内訳は、絶滅危惧 IA 類 (CR) 8 種、絶滅危惧 IB 類 (EN) 11 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 11 種であった。今回、甲殻類の評価対象種は約 3,000 種であり、絶滅危惧種の割合は 1%未満と低かったが、これは海域に生息する甲殻類に関する情報が不足していることによるところが大きく、必ずしも海域に生息する甲殻類の絶滅のおそれが低いことを示しているわけではない。

[2] 絶滅危惧 IA 類 (CR) 8 種については、奄美以南に生息する種が多く、生息地は、干潟 (オガサワラベニシオマネキなど) や海底洞窟 (イエジマガマガザミなど) などであった。また、メナガオサガニハサミエボシを除く 7 種が十脚類であった。これらは、分布域が限られたり、特殊な環境を利用する種であるため、生息環境の悪化が絶滅につながるおそれが極めて高い種だと考えられる。

[3] 絶滅危惧 IB 類 (EN) と評価した 11 種、絶滅危惧 II 類 (VU) と評価した 11 種の多くは干潟に生息する種 (アリアケガニなど) であった。また、二枚貝に寄生するフタハピンノヤ、その他無脊椎動物で絶滅危惧 IB 類 (EN) に選定されたツバサゴカイと共生するウチノミカニダマシなど他種に寄生・共生する種も多く、CR と同様、海底洞窟種 (クラヤミヒラオウギガニなど) も含んでいた。

[4] 準絶滅危惧 (NT)、情報不足 (DD) は、それぞれ 43 種、98 種であった。これらの種については、絶滅のリスクが高いことを示す情報が一般に得にくいため、定性的な判断からこのカテゴリーとした種が多く含まれた。特に、情報不足では、奄美以南の干潟やサンゴ礁に生息する種が多かった。

軟体動物（頭足類）レッドリスト作成で明らかになった点

[1] 今回の評価においては、軟体動物門のうち頭足綱（いわゆる頭足類）を評価の対象とした。環境省のレッドリスト作成（平成 3 年）以降、はじめて頭足類を客観的に評価した。

[2] 日本産頭足類のうち評価対象種として整理された約 230 種について評価を実施した結果、絶滅危惧種はなく、準絶滅危惧（NT）のCATEGORYとなった種が 3 種であった。また、情報不足（DD）となった種はなかった。

[3] 本評価により準絶滅危惧（NT）と評価した種はベイカ、ナギサアナダコ、コツプハナダコの 3 種であり、これらは全て沿岸に生息する種であった。これらの種の減少原因は共に海岸開発で、それぞれの種が生活史の中で必要とする内湾の砂泥域や沿岸の転石帯（石や岩、サンゴ瓦礫の多い海岸）、サンゴ礁などの環境が悪化しているためであった。

[4] 頭足類は外洋性の種が多く、人為の影響を受けやすい海岸線や汽水域の種が少ないこと、基本的に分散能力が高く、再生産のサイクルも速いために回復力が高いこと、また評価に足る情報のある種が少なかったことから、前述の 3 種以外は掲載されない結果となった。

その他無脊椎動物レッドリスト作成で明らかになった点

[1] 今回の評価においては、魚類、サンゴ類、甲殻類、軟体動物の各レッドリストでは扱っていない分類群(その他無脊椎動物)のうち宝石サンゴ、腕足動物、半索動物、頭索動物、環形動物、棘皮動物を評価の対象とした。いずれの分類群も生息状況に関する情報が十分とはいえないことから、比較的情報のある種に絞って評価を行った。

[2] その他無脊椎動物で絶滅または野生絶滅とされた種はなく、絶滅危惧種の総数は4種であった。その内訳は絶滅危惧 IA 類 (CR) 1 種、絶滅危惧 IB 類 (EN) 2 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 1 種であった。今回絶滅危惧種とされたのは、干潟(及びその沖の浅い海)で見られる大型の目立つ種であった。日本全国で干潟を生息地としている生物は近年分布を縮小させており、こういった生物の絶滅の危険度は比較的高いことが推察された。一方で、岩礁域や外洋、深海などの無脊椎動物については今後の情報収集が重要と考えられた。

[3] 絶滅危惧 IA 類 (CR) には、オオシャミセンガイが挙げられた。生息地点も含めよく知られている種であり、既にほとんど見られなくなっていることから、危機的な状況であると考えられた。絶滅危惧 IB 類 (EN) にはアリアケカワゴカイとツバサゴカイが挙げられた。アリアケカワゴカイは生息範囲が極めて狭いことから高いランクとされた。ツバサゴカイは自ら作った 1m ほどの管(棲管といわれる)に棲んでいて、干潟環境においては目につきやすい種類であるが、かつて見られた多くの地点で、近年生体が確認されなくなり、高いランクに相当するとされた。絶滅危惧 II 類 (VU) にはヒガシナメクジウオが挙げられた。学問上重要な種で生息地が天然記念物に指定されている例もあるが、近年はそれらの地点で減少が著しいことが知られ、絶滅の危険が増大していると考えられた。

[4] 準絶滅危惧 (NT) には 21 種が、情報不足 (DD) には 12 種が掲載された。